19

雛子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
１９

【Ｎコード】
Ｎ９２５７Ｊ

【作者名】
雛子

【あらすじ】
１９の時、私は少し大人になった

はじまり

わかった。わかった。行くわよ」

お手上げ
人生も

ある日、迎えがやってきた

見えないそれは
あたしをまだまだ寒い春の中へ誘い込む
桜満開、昨日の雨を飛び越えて
あたしは進む

その先が、嵐でも

・・・っていうか
あたしは三日前から
彼氏だと思ってたんだけど??
と
思ってたら
ふいに店の照明がトーンをおとした。

これからは、大人の時間

細長いグラスに氷をいれた指が、男のくせに妙にキレイに見えて
あたしはちょっと目をそらした。
「ストレートでください」
「のめるんだ?」

のんだことないけど。あたしは、言葉をのみこむ。

この人と、別れるとき、泣くかな。泣かない。

「つきあってみる？」

っていうかさあ・・

三日前から、いろんなとこ行ってるじゃん？？

とは言わずに

「どうして？」

と、言ってみよう

惚れたから

「ふうん」

遊んでもいい。まだ、若いんだし。

「おじさんみたいなこと」

おじさんだよ。ハタチ過ぎれば

「ふうん」

好きなときに、会えばいいし。

他の男とデートしてもいい。

・・・だったら、意味ないじゃん

と思ったけど。黙ってることにした。

港の明かりが、光る。絵みたい、と言いたかったけど
どっちかって言うと、写真みたいだなあ・・と思ってやめた。
なーんだ、公園にいくのか。
ホテルにはいくのかなあ。
帰らないなら、はやいとこ家に電話しなきゃ

公園の前は、海
この辺の海は砂浜がない。
コンクリートの残骸

彼が、キスしようとして、やめた。

送るよ

送るんだ??

4月

光の中をどんどん歩いて行く。
白くけむった街の中を、たとえばだけど
渋谷とか新宿とかのビルの中をくぐりぬけていると
不思議と静かな顔になっていく。
同時に、魂だけが
はしゃいじゃって・・

・・・

このまま、陽の光を頬に感じながら
交差点のど真ん中に立ち止まって、目を閉じる。
そこへ
車が飛び込んできて、あたしの体は宙へ

なんていうのも
ま
いいか
っていう朝だった。

吉水の車が目の前に急停車する
両手を合わせて
それは
謝ってるつもり？

「なんで、セリカなの？」
「いろいろあってさ」
「たいしたことじゃないんでしょ」

「いやあ、話せば長いんだけど、親戚にさ、
超リッチマンがいるわけ」
「で？」
「もらった」

「で？」
「おわり」
「ちがう」
「なに」
「なんで遅れたのよ」

沈黙

「あのさあ」
「はい？」
「黙ってたけど」
「うん」

「俺、彼女いるんだ」

知ってた、とは言わない
おせっかいな洋子が
「吉水が女の人と歩いてた。なんか年上っぽい」
と、教えてくれた。

「で？」
「なんかわりいな、と思って」
「遅刻」
「そう」

「意味わかんない」
「おれも」

「・・・言わなきゃいいんじゃない？」
「お前、いい女だな」

違うってば

次の日

「片山先輩とつきあってるんだって？」
「そうなんだ？」
「なんかむかつく」
「なにが」
「その言い方」

「吉水はどうすんのよ」
「吉水とつきあってるって言った？」
洋子がいらいらしてる
面白い

「どうして、片山先輩なの？」

それは

彼の実家が金持ちだから
彼が女に金をおしまないから
彼がこの学校で一番力を持っているから

とでも言えばいいのかなあ・・

ホンとのことを言えば、楽だから
どこへ行きたい？とか
何が食べたい？とか
聞かないから

と言ってもわかんないだろうなあ・・

先輩とつきあって三ヶ月
手のはやい男だから
どうせ初日にHしてるんでしょ、と
みんな思ってるんだろうけど・・

キスしかしてないって言っても信じないよねえ

大事にしてくれてるわけじゃなくて
まだしたことないって言ったから
責任とか言われるのが面倒なんだと思うけど・・

とは、言わないでおこう

「先輩の前の彼女、女優なんだって、知ってた？
この学校の人で、ひとつ上」

知らなかったけど
知ってたかも

この間、校内の廊下で背の高い、きれいな人とすれ違った
すれ違うとき
あたしのとなりを歩いていた彼が、その人の前に片手をのばした
とおせんぼするみたいに

彼女は、その腕をそっとつかんでくぐりぬけると
なにごともなかったように行ってしまった

そのときの、彼と彼女の顔は
なんだか、切なかった

彼は、何も言わなかったけど
今でも、彼の好きな人なんだろうと
思ったから

その日、彼とはじめてキスをした

雨で
道で
強引で
傘が手から落ちた

涙がでたのは
彼女のかわりなんだなって
思ったから

あの日

別れは突然にやってきた

その日
別れるつもりはなかった

就職の報告で帰省していた先輩が
また戻ってきた日
半月ぶりに待ち合わせた喫茶店で
あたしは
なぜか

もう別れましょ
と
言ってしまった

いつ言ってもよかったのに
言わなくてもよかったのに

大体、あたし自身が
どうして別れるのかわからなかったのに

彼は
静かに箱を差し出した

箱を開けると
するりと何かが膝の上に落ちた

「それは」
と
彼が言った
一番好きな人に
あげようと買ったもの
ゆらゆらと
プラチナの鎖の先にゆれる
ダイヤモンド
あたしは・・・
店の前で
「どっちから帰る？」
と
彼が聞いた
「こっち」
あたしが指差す
「こっちからしか、帰れないの」
ふっと
彼が笑って
あたしの頭に手を置いた
雨だった
ひとりで

角を曲がった時
涙が止まらなくなった

誰も通らない路地にうずくまって
声をあげて
泣いた

どうして
あたしは

どうして

回想

親父の跡は継がない
と
いつかの日
先輩は言った

田舎の暮らしは
君には無理だろう

ふうん

（ソンナフウニミエマスカ）

最終面接の終わった日
彼の部屋で
電話が鳴った

電話を切った彼が
ふいにあたしを抱きしめて

しあわせになれるよ
と言った

それは
プロポーズ？

誰よりも

強くなるから
合格したの？
おかげさまで
おめでとう
欲しいものは？
ほしいものなんてない
ほしいものがないなんて人はいないよ
ない
それは、うそだよ
本当にないから
だったら
と
先輩は言った
探さないとね

ちょっとしてから

どうして周りの男をみんなもっていっちゃうんですか
と
高校生チームの清水さんが泣きながら言った

あなたにかなうわけない
誰か一人に決めてください
って
あたし、だれかとつきあってたっけ？

「吉水さんが好きなんです」
「そうなんだ」
「じゃなくて」
「なに」

「吉水さん、彼女いるんですよ」
「知ってる」
「でも、好きなんです」
「そうなんだ」

「この間、遊びにつれてってくださいって言ったら」
「うん」
「彼女がいるからだめだって」

あらら

「でも、どうしてあなたは車に乗せるんですか？」
彼女でもないのに？

「他に彼氏がいるって聞いてます」
みんなが言ってます
あなたが吉水なんてまともに相手にするはずないって
だから、吉水さんに近づかないでください

って言ってもねえ・・・

先輩と別れて傷心のあたしに
なんてこと言うんでしょ

アナタハヒトツマチガッテイル
アタシハ・・・

そして吉水また遅刻

「いいかげんにしなさいよ」
サイドミラーで髪を直しながら
あたしが言う

「ごめん、いろいろあってさ」

「吉水の事情なんて知らないってば」

「つめてぇ」

「清水さんに言われた」

「かわいいよなあ、高校生は」

「だったら、デートくらいしなさい」

「いや、若いのは無理」

「あたしは？」

「いくつだっけ？」

「１９」

「同い年かあ」
おれさあ
年上好みなわけ

「彼女いくつ？」
「２６」
「ＯＬさんね」
吉水が大笑い
「なによ」
「いや、お前はＯＬになんてならないだろうと思ってさ」
「なんでよ」
「どっかの、社長の息子と結婚してさ」
「そうなんだ」
「そうそう、おれなんて、絶対工場勤めとかだからさ」
「なんでよ」
「スーツ嫌いだから」
あっそ
「笑えば？」
「なんで」

「悲しそうな顔すんな」
あと・・・
「なに？」
キスするときは
目を閉じろ

いつかの夜

いつも
と
吉水が言う

こっちを見てるんだけど
おれを通り越して
遠くしか見てないような
その目が

好きだよ

「じゃ、キスくらいすれば？」

おいしいな

なにが

いろいろ

おいしくないかもよ

おいしいよ

吉水が
そっと
噛んだ首筋が

いとおしく
いとおしく

あたしは吉水が
めちゃくちゃ好きだ

その後

「遠すぎるよ」
と
雅彦が言う

いつの間にか
あたしは雅彦の彼女になっていたらしい

映画に行って
ケーキを食べて
美術館にも行ったけど

キスに夢中になった雅彦が
靴を溝に落として
大笑いしたけど

あたしは、いつ
雅彦の彼女になったんだろう？

ここのところ
何度か
デートの約束を

土壇場でキャンセルした
で
「遠すぎるよ」
になる
「なんで、毎日会わないといけないの？」
「一ヶ月も会ってない」
「そうだっけ？」
「どうなってんだよ、お前の頭の中」
「雅彦は、あたしを信じてない」
「どういう意味？」
「あたしは、何年会わなくても、平気だから」
これは、うそだ
あたしは、ほんとは
ずっと一緒にいたい
でも
ちがう
ちがうのは・・

「でもさ、いったんは約束するだろ？なんで、ドタキャンなわけ」

それは
いつも

そのときに限って

吉水が
会おうって言うから

あたしは
ほんとは
わかってる

欲しいのは
吉水だけだ

それから

夜のドライブに誘われた
もちろん吉水

吉水は週末になるとどこかに走りにいく
何度も、行きたいと言ったのに
危ないからと断られた

たまたま、電話しているとき
友達から誘いがあったらしく
なぜか
「行く？」
と
聞いてきた

もちろん

じゃ、迎えにいくよ

吉水の家から
あたしの家までは車で２０分

さて、どうしよう

家族の寝静まった夜中
あたしは１階の雨戸を
５分かけて
音がしないようにあけて家をでた

もうすぐ、夏がくる
夏になったら
と
吉水が言った
北海道に行くんだ
あたしも行ける？
みんなにばれたら大騒ぎだなあ
なんでよ
おまえ、人気者だからさ
静かに吉水の車が止まる
「車、変えたの？」
「これ」
と吉水が右腕を指す
「事故？」
「廃車」
運転を始めると、吉水はほとんどしゃべらなくなる

夜の色がどこまでも
「やっぱ、やめればよかったな」
「どうして」
「あぶないから」
あたしは、言いたいことばがのど元まで
でも
言わない
「怪我でもさせたら・・」
「責任とってもらう」
吉水爆笑
「いいよ、大歓迎」
夜の山道は
車のライトの洪水で
「人がいっぱい・・」
「いろいろあるんだよ」
頂上近くの広場で
吉水が車から降りた

人影が集まってくる
「なんだよ」
やけにおとなしい走りしてんと思ったら、女連れかよ
「いろいろあってさ」
「こんばんは」
と
人影が次々と車をのぞきこんでくる
「降りる？」
と
吉水がドアをあける
「降りてどうするの？」
「星が」
と
吉水が空をあごで指す
「つかめそうだから」
あたしは空を見上げる
吉水はこっそり髪にキスをする
どうして
あたしたちは
ずっと一緒にいられないんだろう

ある日

「明日、暇？」
と
吉水
「なんで」
「忙しかったらいいんだけど」
「だから、なに？」
「・・大学、行かない？」
「誰の？」
「おれの」
「なんでよ」
大学なんて、ずっと行ってないじゃない
「だからさ、行ってもいないのに、学費払ってもらうのわりぃじゃん？」
「で？」
「退学届け出しにいく」
「あたしと？」

「そ」

彼女と行けばいいじゃない
とは
言わない

一瞬でも、彼女のことを思い出してほしくない

吉水の大学までは、1時間の距離だ
いつもより、もっと、しゃべらない

あたしは、ほっておく

事務所で紙切れ1枚
出しておわり

「別に、ついてきてもらうことなかったよな」

「それって」
今言うこと？

「だな」

吉水が笑う
最後のキャンパスで
あたしは
吉水の顔に手を伸ばす

「さびしいの？」

その顔は・・・

と

あたしは思う

彼女には

見せられないってわけね

そして

のみ過ぎた

立ち上がろうとして
眩暈がした
雅彦の手が
あたしの腕をつかむ

「はなして」

ふりほどくあたしの力より
雅彦のほうが強い

「立ってられないじゃないか」

「立てる」

「どうしてそんなに・・」

「なにもわかってない」

あたしは
雅彦にわがままだ
それで
それに
いらいらする

「なにが気にいらないんだ?」

「べつに」
ネコみたいだ
と
雅彦が言う

気が向けば
どこまでもやわらかく
気が向けば
どこまでも甘えて

でも
次の瞬間

まるで
俺なんか
いないみたいに

遠くを見る

「今日は」
と
あたしが言う

映画に行った
買い物にも行った
散歩もした

雅彦のくれた指輪もはめてる

あとは
なにをすればいいの？

「抱きたい」

あたしは黙って外を見る

ふわふわと
ふわふわふわふわふわ
雪が降る

この部屋に
いつも流れる
えいごのうたと

雅彦が
淹れる紅茶の
その香り

「この手が」
すきだ

「手だけ？」

「ちがう」

「ねえ」
と
あたしが言う

「お誕生日おめでとう」

「おまえは」
１９のままでいろよ

ふわふわと
開けた窓から
雪の影

雅彦が痛いほどに
抱き寄せる

あたしは
目を閉じる

それが

それが
望みなら

また雪

その夜も雪だった
雪の日は・・

背後に車が止まるのがわかっても
あたしは振り返らない
窓が開く音がして

「姫！」
と
吉水

思わず笑ってしまう

「いつから姫に？」

「今」
だけ

ふうん

「別れた」

「聞いた」

「雪だよ」

「見た」

なんでも知ってるんだな

「仕事はどうなの？」

「年功序列」

「なにそれ」

「相手がばかでも、年下でも、頭を下げるってこと」

「ふうん」

「どこ行く？」

「たまには、聞かないで、行きたいトコに行けば？」

「ホテル」

「ふうん」

「・・・おまえさあ」

「なに」

「やだあ・・とか言えよ」

「別にいいけど？」

吉水のため息

あたしは、窓の外を見る
積もらない雪が
ほろほろこぼれる夜の中
どんな言葉がなぐさめる？

「彼氏は？」

「元気なんじゃない？」

本当は、彼氏なんていない
でも
言わない

いつも
吉水に彼女がいたから
別れるたびに報告できた

「いいかげんにしろよ」
と
吉水はいつも笑った

先週
雅彦と別れたときに
言いかけたときに

吉水が
彼女にふられたと言った

だから
言えなくなった

いつだったか
吉水が言った

おまえさあ、彼氏がいないときはないわけ？

あるに決まってんでしょ？
あたしは吉水みたいに不真面目じゃない

おれのほうが真面目だって

車が変わると女が変わってる人のセリフですか？

タイミングわりいんだよなあ
こっちにいないときは
そっちにいて

相性が悪いんでしょ

だな

「でも、もし」
と
吉水が言った

タイミングが合ったら
ちゃんと考えないとナ

なにを？

おまえのこと

だから

だから

あたしは・・

結局

男が女をなぐさめる方法は
ひとつしかない

ならば
あたしは？

どんなことばで
あなたを
なぐさめる？

「悲しいの？」

「別にいいんだけどさ」

「ホントにぃ？」

あたしは、吉水をのぞきこむ

「その顔やめろ」

「なんで」

「キスしたくなる」

「すればいいじゃん」

あたしは

吉水の首に
腕をまわす

やわらかく
やわらかく
吉水があたしを
抱きしめる

あたしは
ゆっくり
目を閉じる

ねえ
吉水

あたしも

あなたを
なぐさめる方法を

ひとつしか知らない

それは
雪のように
そっと消える時間

そんなこんなで

あたしは
２０になった

２０の前の夜
りえこと
ときちゃんが
車で迎えにきた

両親旅行中の
りえこの家で

おとうさんの秘蔵のボトルを
一本空けて

死ぬほど
頭痛のする
誕生日になった

家に帰ると
プレゼントの
花だらけで

吉水は
次の日

忘れてた
と

平気で
電話してきた

そんなこったろうと
思ってたけどね

吉水が好きで
すきですきで
どうにもならなかった

デートのあとで
車から降りるとき
せつなくて

だから
さっさとドアを閉めて

「あっさりしすぎ」
と
吉水に笑われた

一度だけ
こんどはいつ会えるの？
と
ききたくて
きけなくて
降りなきゃいけないのに
降りられなくて
泣いてしまったとき

吉水は
黙って
アクセルをふんだ

しばらく
車を走らせて

「海だよ」
と
ぽつりと言った

真っ暗で
なにも見えない海を
黙って
だまって

ふたりで眺めた

どうして
あたしたちは
ずっと一緒に
いられなかったんだろう

吉水の言う
タイミングは
何度か合った

でも
言わなかった

いつか
どこかで
どんなかたちかで

必ず
別れるときが来る

あたしは
吉水を
絶対に
失いたくなかった

あたしは
とても
弱い

だから

何年かして
先輩に会ったとき

フレンチのコースのあとで
彼が言った

あのころの君は
いつもわくわく歩いていた

誰に出会っても
誰に抱かれても

そのままで
変わらないで欲しかったから

「だから？」

このとき
先輩がなんて答えたか
忘れてしまうほど
時間がたって

おそらく
今
最後の恋に

吉水を重ねる

きっと
思い出しているのは
吉水ではなく
あの頃の自分なのだろう

いつまでも
１９ではいられない
２０も
２１も・・・
そのおかげで
今が
あるんでしょうねぇ

「だから？」
お誕生日おめでとう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9257j/

19

2011年10月6日19時02分発行